

依怙壯

坂井瑞穂

瀧壺の章

“それにしても暑い日だ。まだ五月だというのに。”
軽く汗を拭うと、行徳伝二郎は重い足どりで踏みあとを固めた。この数日、彼はこうして鑄木川に沿った小径を漫歩することで時を過ごしていた。もはやいまの伝二郎には若かりし頃の社会主義活動家としての稜々たる気概はない。

思い起こせば明治三十九年、いまから四年前のことだ。活動家の同志、外山賢堂が捕縛され、以来互いに価値観を認めあえた仲間は、逐次彼の許を去っていった。内妻同然の菅井すがは近頃の伝二郎の態度を訝り、より過激な抗議活動を執拗に薦めた。そんな毎日に辟易していると、先週遂に信州筑摩に在住の森下申吉が国家叛逆罪の咎で当局に捕縛されたというのだ。申吉宅から大量のブリキ罐と薬剤、起爆剤が発見、押収されたらしい。

“森下の奴め、取返しのかめことをしてくれられたもの

だ。”

ある程度予期していたが、このことは民平新聞在勤時代から当局に睨まれ、逮捕歴のある伝二郎の立場をも危うくするに十分な出来事であった。

爆薬を使った天子さま暗殺、などというおよそ革命と呼べぬ愚行。伝二郎は真の革命へと導くべく何度も思い留まるよう説得を試みた。しかし既に調教された土佐大のごとく、今まさに仇敵に噛みつканとする連中に、伝二郎は逆に腑抜け呼ばわりされたのである。

こうして豆相国境の土肥荘に赴いたのも、今後の身の振り方を模索せんがためではあるが、執れにせよ自身の足どりも目敏い反動側に知れ渡っていることであろう。温健派とうたわれ、あれだけ友誼に厚かった外山も、その著書のなかで徹底した天皇批判を繰返していたために、はやい時期に革命の芽を摘みとられていったのだ。当局からみればこの己も、森下や菅井たちと同穴の貉なのだ。

急に踏跟いて我にかえると、知らぬ間に泥濘に踏み入っていた。

たしかに今の伝二郎に闘士らしい覇気は失せていた。齢四十を迎え、ただでさえ虚弱な体躯が病魔に冒されたのか疲労感に押し潰されそうなのだ。実際彼は仲間を諫められなかったばかりか、連中の醜聞を笑いとばしてや

することも出来ずにいる。

いつしか伝二郎は瀧壺の処に来ていた。鑄木川の支流が本流へと、高さ十五米程の瀧となって涼し気な水音を落とす、瀧壺の脇に小さな不動の祠があるだけの、普段なら全く人気のない場所である。

瀧壺に誰かいる。行者であろうか。静かななかにも張り詰めた息遣いが届いてくる。伝二郎は兎に角、急な鉢合わせは避けておきたかった。瀧見物を諦め、早速その場を離れると、逗留先の「はるのや」へと戻ることにした。彼にとつて温泉療養を兼ねた、ここ土肥荘への来訪は二度目のことである。一度目は、以前に勤めていた新聞社にて刊行物を相次いで発禁処分になれ、活動家としての将来に八方塞がりをおぼえはじめた頃であった。そしていま伝二郎は、出来るだけ人との交流を閉ざしてしまいたい心持ちになっていた。

それに温泉保養地をとりまく地域の土地風情もかなり変わってきているようだ。行交う人々の顔ぶれからも、それは窺えた。

土肥荘は温泉場を貫流する大蔵川と三軒北を流れる新垣川に挟まれ、海側より城山、そして幕山が位置する。実はこの山域において数年前より大規模な造林事業が始まった。これは何も足柄県内に限った話ではなく、維新後、対外国戦争で形の上では二戦二勝、既に西列強恐

るに足らず、などと国粹主義者等の浮かれた台詞が紙面を賑わす一方、急ぎ足な産業革命の陰で吾が国は、疲弊した国内経済を快復させる責務を負っていた。

一見我武者羅なこの林政も、政府の奨励する産業改革の一環で、全国の主だった森林地帯では、開発と銘打って拓殖鉄道、林産鉄道が建設され、全山丸裸になるまでの皆伐計画が試行されつつあったのだ。この政策を敢行すべく、各地では集落部落単位で伐採跡地の造林作業の成果を競わせた。地元民は褒美欲しきで仕事に励み、働いては森林作業の専門員の雇傭が当り前になると、そんな連中と地域社会との軋轢が新たな社会問題となった。

かれら独自の「山中」という掟社会、定住を望まぬ要員の集団を、権力をもつ世話役が束ね、度々暴力沙汰をおこす。おだやかなこの土地にも徐々に悩みの種がふえてゆく気配だ。

そういえば近頃、森林作業員達が妙な会話をしていた。どうやら巨大な彗星が落ちてくるとか、落ちてはこなくとも縁起悪い星のせいで田圃の稲が実らないとか、魚が不漁になったとか、根拠のない噂話をどんどん広めている始末らしい。

その晩のこと、伝二郎を訊ねて「はるのや」に来客が現れた。

「私は岡村究丞と申す者です。いまはこの先の田舎家

に侘び住まいをしておりますが、行徳先生と同郷、高知県幡多の郡の出身です。」

得体の知れぬ訪問客には会わぬと、はるのやの女将には告げてあった。或はその輩が追手かも知れぬ以上、伝二郎は屋外にて待機した。だが岡村と名乗るその青年の後姿を見て、その人物が怪しい者ではないと瞬時に見極め、応対することにした。

漆黒の闇に息をとめ、両人が互いを確認すべく歩み寄ると、草叢から跳ねた螢らしい小さな光が徐ろな軌跡を描いて、やがては齧谷の方へと消え去った。

「これは行徳先生、不躰な訪問の仕方です。申し訳ありません。こちらに逗留されているとききまして、お会いしたく思っております。先生、きょう不動の瀧へいらしたでしょう。」

伝二郎は一瞬、己の行動を察せられた喫驚を感じた。

「すると瀧修行の主は君だったというわけか。」

「いえ、とても修行とよべるものではありません。暑苦しさに堪えきれず、川遊びをしていたというのが本当のところですよ。先生、星を見に行きませんか。珍しい彗星が今晚見られるというのですよ。」

「民衆の騒ぎの種となり、恐怖心を煽っているペリー彗星のことか。君はそのことで私を訪ねて来たのか。」

伝二郎の緊張はなかなか治まらなかった。

「今度ののは更に巨大なトーチタス彗星です。分教場の裏山の樗が伐採されて見晴しがよろしいようなので。」

二人は携えた明かりを頼りにその高台を目指した。話にきいていたとおり、草地となった伐採跡地には彼ら以外にも幾人か、いや数十人が彗星見物の先客となつて陣を張っていた。先導を務めた岡村が居場所を見つけると手際よく提灯を火を消し、懐中に収めた。

「私はいつも乍らこの小田原提灯というものの便利さに感心しております。」

「岡村君、君は土佐の幡多郡の出身といつていたね。」

「幡多郡内、狼内というところです。私が幼少の時分、三原村に編入され今日に至っておりますが。」

「三原村か、行ったことはないが随分と山深い村だと聞いている。」

「先生の故郷、清松村の大岐より海伝いに六里、大津漁港から川を逆上り三里程、行き着いた袋小路の村が狼内です。」

周辺では歓声をあげる者もいたが、まだ彗星は現れていなかった。

「私の育った狼内は、集落の半数が幕末の頃に肥前の佐世保や平戸から移住した船民集団なのです。そのなかにファン・ホウデンという蘭医の家族がいて、私はこの倅とずっと仲良しでした。私が彼の家で基督教の洗礼

名アベルを受けたとき、これが父に知られ、こつびどく叱られました。中浦神父や木部神父のような目に遭つたらどうするのだと。まさか三代將軍家光の時代ではあるまいし、とそのときは父の説教を冗談半分にきいていましたが、近頃は父の心配も割と的を得ていたのではないかと思うのです。

岡村は微かに笑みを洩らした。

「時世は数百年を経て、人々の頭脳や感情といったものはそれほど進歩してはいないと思われるからです。例えば維新後に生まれた現在の人たちがトーチタス彗星を不吉と考え、天変地異の兆しとしてしまうあたり、たつた一度の皆既日食が原因で民衆が混乱し、その結果滅亡してしまつた九州の古代王朝と大同小異なのですから。」

幕山のあたりから輝かしい尾鱈をはためかせたトーチタス彗星が現れた。

「先生、見に来てよかつたでしょう。トーチタスは太陽系惑星とは違う独自の楕円軌道をもつていて、これだけ明瞭な全姿を見られるのは七十年間隔だということです。こうして美しい彗星を見られることは、決して不吉などの類いではなく稀有な幸運なのだということを、何故に人びとは捉えようとしなんでしょう。」

少なくともこの場にて幸運を得た少数の者たちは相変

らず壮大な天体の演出に酔いしれた儘であつた。

「さすれば君の本懐は？」

「私が僻村の育ちでありながら勉学の機会に恵まれていたことは既に申し上げましたが、その背景の社会基盤には、大居士封先生の『自由』の心があつたのだと思います。『吾死すとも自由は死せず』の強い意志の表れとなつて。」

岡村は続けた。

「私これまでキルキエゴール、オルテガ、ダンテ、ペトラルカ、ラマルティヌス等を読みましたが、これらの書物のなかには、この国の純朴な人々、島国という揺籃のなかでこれまで危機に直面したことのない未成熟な人々を、徐々にではあつても啓蒙して遣るに必要十分な要素も多数含まれています。」

ほんの一時期ではありましたが、箱根大平山の外山賢堂先生のところでは書生をしていたことがあります。同じ頃、武州皆野村出身で餓民党蜂起隊員を親類にもつ岩原樹海も働いておりました。清閑寺もいまでは主を失い廃寺同然ですし、社会革命家の将来の第一人者と期待された岩原も、派手な活動を咎められて勤務先を僻地の初等学校に変えられてからはすっかり消沈してしまいました。」

「そうだったのか。君が外山達と共に活動していたと

はな。」

「外山先生の入獄が、わが国の将来の不利益しか齎さないことは陽の目を見るより明らかです。失礼極まりない発言にて誠に申し訳ありません。ですが行徳先生のご最近の苦渋に満ちた歩み様、この最大にして『至高の難局』を何に起結するとご判断されましよう。」

伝二郎は声も出なかつた。精神的に耗弱しているといえ、この己が書生風の若造に痛い腹を探られるとは。だがその悔しさよりも、頼もしい後輩に出会えた素直な喜びのほうが大きかつた。

「私が同郷の先輩活動家である先生に会おうと決心したのも、ひとつの結論として、これは思想家としてのものですが、訴えたいことがあるからなのです。単刀直入に申し上げます。アルベルト・シアフレの哲学手法をもつてしては社会主義革命は不可能だということです。」

自国の民衆を卑下するようで非礼と心得ますが、少なくとも社会的に未成熟で幼稚な人民を抱えるわが国においてはよい方法であると思われません。」

「岡村君、嘗ての私であつたなら、君を書生として迎へ、私の仕事を助けてほしいところなのだ。だがいまはそれが出来ぬ。非常に残念だが。」

「先生、深刻にお考えなされませぬ様、あ、問題の火蓋を切ってしまったのは私のほうでした。失礼。」

明日、おからだの具合がよろしいようでしたら、伝土肥椋山巖窟へ行つてみませんか。彗星の現れた暮山を越えた向う側へ、歩き易い道がずっと続いてますから、源平合戦の跡を覗いてみることにしましよう。」

伝土肥椋山巖窟の章

岡村究丞は、馴れた脚運びで一氣に登つてゆく。伝二郎は山歩きなど全く自信がなかつたが、それほど遅れることなく目的地の巖窟に近づいていた。昨夜トーチタス彗星の現れた暮山の頂は遥か下の方に見える。その向うにはうっすらと海岸線が弧を描いていた。

ひろびろとした草地で一息入れようと伝二郎が道標の石に手をかけると、懐に忍ばせてあつた紙片が落ちた。それには達筆で走り書きがされていた。

「おつといけない。吹き飛ばされてしまふところだった。」

「先生、それは?。」

「今纏めている論文だ。『基督壞滅論』という。いや、まずかつたな。君は洗礼を受けていたのだったな。」

伝二郎は気まずそうに手を頭にやった。

「だがな、岡村君、私はこれに記したとおり一貫して神の存在を冒瀆してはいるが、信仰の自由まで否定はし

ていない。宗教とは、人と神との個人的契約、本来なら
そうである筈なのだ。人が大切に思い、心の依り所とし
ているものにまで、部外者が口を出す必要はない。

しかし神といえども、それが政治手段や、或は営利目
的をもって用いられるとするならば、必ずもって否定さ
れなければならぬ。無論責められるべきは非道を行った
人間の側にあるのだが。

この論説をもつて、今の世に頭を煮え滾らせている連
中を諷めてやることも可能とみている。更には、わが国
の精神風土に調和する宗教理念を、無神論を通じて説く
ことでそれは完成する。」

「素晴らしい。偉大な発想です。」

伝二郎の論説を称讃した岡村は続けた。

「私がシアフレ流社会主義を否定する理由は、ひとつ
の社会を人体に譬え、人間ひとりひとりがそれを形成す
る器官であると考える基調があるからなのです。

人間は皆、その人格形成期において、理想をいえば自
給自足の生活を試すなどして、他人の助力なくしても生
きてゆく能力を身につける必要があるわけです。社会だ、
世間だ、などというのはその後で十分です。社会という
ことは、個人の複合形態として存在するのですから。

つまりわが国の人民のように、純粹培養の、つくりた
ての豆腐みたいな儂い人たちは、シアフレ式の社会主義

を唱える資格すら持ち得ぬと断言します。

これまで社会主義を語るうえで常識的とされてきた序
列、はじめに国ありき、そして地域社会があつて家族、
さいごに個人が存在するという考えを、まず最初にこの
順番を裏返しにしないでななりません。」

相模湖のほうから急に雷雲が沸きたつてきたかと思
うと、直ぐに大粒の雨を落とすはじめた。熱っぽく語つ
ていた岡村究蒸も冷静を取戻し、伝二郎に避難を促した。

「先生、こつちです。巖窟の中へ逃げましょう。」

巖窟の入口は手狭だが奥ゆきは広く、岡村が昨晚同様
懐中にしのばせていた小田原提灯に蠟燭を燈すと岩盤が
複雑に入り組んで見えた。

「さあ、もう大丈夫、雨水もここまでは流れ込んでこ
ないでしょう。」

「本当に凄い雨だったなあ。」

「梅雨入りも近いということでしょう。ところで先生
昨夜、はるのや」さんの燈籠のところで蛍が飛んでいっ
たのを見ませんでしたか。」

「いたいた。一匹だけであつたが。」

「ではあの蛍が何蛍かお判りになりましたか？」

「よくは見えていなかったからなあ。しかしここ、土肥
荘は源平合戦期には源氏方の御家人となつた土肥実平公
の領地だ。故に源氏蛍ということか。いや、あの蛍は光

も臆気で凶体もさほど立派ではなかつた。すると平家蚩か。」

「あの蚩は私がお待ちしている間、ずっと私の着物の袖に留まっていたのです。赤い蚩でした。あれは紅蚩です。」

成程、と納得した伝二郎は、若い相方の洞察力に脱帽した面持ちでいた。

「大雨のせいで話が途切れてしまいましたが、ここでひとつ興味深い事例をあげましょう。いまから一千年程前の西班牙の話です。ラテン諸国には古来より反復定韻律四行詩（ロマンセロ）という半ば東洋調の詩歌がうたわれてきました。これらの詩は、宮廷などの特権階級にとどまらず、広く市民に親しまれました。

放浪の吟喟詩人などはこの形式でうたうのを最も得意としていたわけで、現在に至るまで多くの詩編が書き残されています。

幽かな風が提灯の火を揺らした。熱弁する岡村の手が胡弓でも奏でるかのような仕草に映った。

「当時西班牙はアラブ系のムーア人に領土を侵害され北へと逃げなくてはなりませんでした。その後五百年を費して国土を再征服するのですが、一方的に攻められていた時期から力量拮抗の時期を経て、攻勢に転じ、榴槤戦争にて完全勝利が決定するまでの五百年の間、詩の内

容に一定の変化がみられるのです。

初めの頃はただ単に悲しいとか、恨みとか、否定的感情ばかりが目立ち、やがてはムーア人たちに対して友好的な感情をもつようになる。そして故国優勢下においては、敵を憐れみ、思いやる歌がふえていくのです。

要するに戦争という正しくない方法ではあっても、国が富むにつれ中世エスパニヤの人びとは人格を形成し、おとなになっていったのです。

間髪をいれず、彼は続けた。

「この論調で、いま先生が抱えておられる天皇制に関する両刀論法を分析してみましよう。というよりまず、天子さまと崇め、その是非を論議することさえ禁忌として押え込むか、さもなければ罵倒し、攻撃対象とすればほどに両極端な二者択一を迫る必要が果たしてありましようか。

私にいわせれば何故もつと冷静に、そして温厚篤実に思考することが出来ないのかということです。

建前として天皇を尊重しながらも、本音ではこれを軽視し、その姿勢にて世を治めようとしたのが源頼朝です。不幸にも源氏の世は短命に終わりましたが、今後近未来において社会が成熟し、国が繁栄し、それとともに人民も成長して、知的教養文化水準を更に高め、長寿を全うする世ともなれば、その国が仮に立憲君主制をとつ

ていたとしても、社会主義建設に何の支障もありません。既に天皇制は象徴主義^{サンギリズム}にて精算されるのですから。」

「象徴主義とは、飛躍しすぎてはいないか。」

「いえ、外国の、一部の先進国では、その兆しをみせているところもあるのです。」

「君はまるで見てきたように言うのだな。」

「そこで話を戻しますが、正しい社会主義革命は第一に個人から、ひとりの人間が己自身と周囲にいる者たちをよく観察し、それから社会を正視する眼を養うこと。そしてこの場合、『世間』などという曖昧模範な表現は絶対にはいけません。」

熱弁を奮った岡村の顔色から急に血の気が引いた。

「先生、私の意見に何か不適切な言動など、ありましたでしょうか。」

「いや、躍々たる若者らしい意見だ。少々強引な論法も含まれているが、私も嘗ては藤江先生によく喰って掛かっていったものだ。そんな時分の私に比べたら、君の方が遙かに冷静な分析が出来ていると思う。」

行徳伝二郎の社会主義思想の形成期は、演劇活動を通じて知り合った啓蒙思想家の藤江小民^{フジエノコトミ}の書生となった約三年の月日にあるといえよう。勿論、苦節苦難にみちた少年時代にも学校の作文で、社会に対する不満をつぎつ

ぎと並べたて、顰蹙を買ったというのだから、その下地は幼少時から十分にあつたとわかるのだが、何れにせよ伝二郎が藤江の許を離れたときを起点として、その後の彼の人生は決定づけられたのである。尤も彼の近作である基督壊滅論にしても、藤江の確立した無神無靈魂説を継承発展させた唯物論であるといえるのだが。

一方彼らを取巻く社会情勢は凡そ悠長に構えている筈はなかつた。時すでに日本海開戦に突入し、前衛活動家たちは『開戦か非戦か』の簡標を掲げ、徹底した非戦を呼びかけた。そして伝二郎も、『この法平等にして高下なし』とうたつた白岩汗香^{シロイワアツカ}の主催する萬報朝社に雇傭され、彼の文才と行動力を最大限に生かす本格期へと移つてゆくのである。

だが伝二郎たち社会主義活動家は不運にも、軟弱土壤ともいふべき、確固としない社会の混沌にいた。啓蒙研究会の初期構成員の間でも次第に仲違いがみられるようになった。お互いに社会主義建設を目的とする立場にありながら、大同小異の小異の部分ばかりが注目され、意見を取交わすことも減つていった。労働組合既成会をたちあげた頃から苦楽をともにする仲であつた両山竊^{ニホウサンカウ}とも、このごろは近くにしても眼を逸らす関係になり下がつているし、伝二郎の弟分であつた川上玄齋^{カハシケンサイ}も渡米したのち、一度手紙をくれたきりなのだ。どうやらあちらに

永住を決意したとみえる。

洞窟の入口の方から明るい光が差すのを確認しながら
伝二郎はふと考えた。昨晩初めて会った岡村究丞だが、
この男をもう五年早く知っていたら、己の失点も幾らか
は防げていたかもしれぬ、そう思えた。

眼前では岡村がひんやりとした風を浴びて涼を楽しんで
いる様子だ。しかしこの男には不安とか畏れといった
感情は存在しないのか。毅壮たる自信は何故のものか。
それでいて燃え盛る強い情念のようなものは少しも感じ
させぬ。そうだ、あの灌壺での岡村の行動も、己には修
行にみえたが彼自身には単なる水浴びであったという。
彼には行為の動機づけに僅かの緊張もいらぬということ
なのか。

暫く沈黙していた岡村は微笑をみせた。

「私の師、外村賢堂が論外な捕縛をうけ、私は見せつ
けられた現実に対し、自分が如何に無力かを思い知らさ
れました。それからは独学の日々を費すだけでした。史
学、文学に始まり天文学、易学、宗教学、神秘学、神智
学それに人間行動学や群衆心理学と、興味の沸いたもの
は徹底して反復演習して勉強しました。けれども机上の
空論をたたかわせるだけの努力から訣別するときが遂に
来たのです。」

行徳先生なら私に聞く耳をもつてくださるかもしれ
ぬ。そう胸を踊らせていたというのが本当のところだ
す。」

伝二郎も内心嬉しかった。岡村のように明晰で優秀な
若者の意見も、譬え高名ではあっても脳味噌が凝固反応
をしてしまった大先生が相手では、折角の勉強の成果も
皆目役立たずということになるであろうから。

「行徳先生には感謝しています。」

「いや、私こそこんな暗れやかな心持ちになったのは
何時以来だろうか。」

野洲の正田耕造代議士が渡良瀬川鉍毒事件の被災民を
救うべく全国を南船北馬し、直訴状謹奏の清書をこの私
に依頼してきたとき、正直私は喜びよりも驚きのほうが
大きかった。」

「謹奏は天子さまの眼に触れるまでには至りませんで
したが、正田代議士の荣誉ある行動のお陰で、それまで
人を人として扱わなかった政府が漸く、公害被災調査に
ふみきるなど、重い腰を上げたのです。」

明らかに社会は一步前進しました。正田代議士も喜ん
でおられることでしょう。」

伝二郎は二、三度うなづいた。外からの風につれて薄
い霧が舞い込んでいる。どうやら風もしずまったようだ。

「岡村君、さっきから私は気になっていたのだ。君の

予知能力にも似た、優れた洞察力は見上げたものだが、君が自学自習したという珍しい学問と何か関連があるのかね。」

「いいえ先生、そんな大仰なものではありません。」

私は仏教においては門外漢でさほど詳しくはなかったのですが、外山先生の薦めもあって先代救事本記や厩戸皇子（聖徳太子さまのことですね）の憲政草稿といった古書を読みました。すると今の世の混乱めいた実情が、平安時代に流行した末法思想に置き換えて説明できることがわかりました。

つまり釈尊の没後、人の世は五度の変革を繰り返すわけです。第一から第五の世までその区切り毎に、人間社会の様子が大和の法隆寺五重塔の内壁に詳しく描かれていました。けれどもこれらは現存していません。太閤秀吉の時代、危険思想を孕むと判断されて、全ての絵は塗り潰されてしまいました。

外山先生の話では五重塔の最上階には、高度文明にゆきついた今の世の姿が描かれていた筈なのだということです。」

「最上階だって？もうそんなところまで来ているのか。」

「太子さまが公布された、わが国最初の憲法の第一条、
“和をもって貴しと成す”の意は決して馴れ合い政治を奨励するものではありません。和の旧字はとても画

数の多い文字で、本来は、穀物を十分に確保して、よい囑託を得て、じっくり栄養をとるという意味をもっていました。農耕民族らしい牧歌的な憲法の条文ですね。」

一方われわれの世はどうでしょう。産業構造改革で他国に遅れをとったのを一気に挽回しようと、誰も彼も躍りになって己を見失い、この古い憲法をも犯す結果となつていきます。いまやこの国は各地で、神々のすまう土地とされてきた森林を片端から破壊し、ここ足柄県でも、造林育成事業の名のもとに暖帯林が皆伐されている実情です。」

大抵の人はトーチタス彗星の崇りだとかいつていますが、もっと恐ろしいものの存在には全く気付いてはいません。ですが人は追いつめられ、極限状態に達すると、
“闘争か逃走”という両極端な行動にでるといいます。これは心理学というフアイト・オア・フライトの直訳ですが。」

「第五の世が終結するのはいつなのだ。」

「あと百年足らずです。このようなときだからこそ、先に気がついた者が逐次啓蒙してあげる必要があります。」

「では第五の世が終わると、どうなる？」

「それは判りません。ですが現在が五重塔の最上階ということ、近い将来私たちは屋根の上に出してしまうの

ではないでしょうか。不安定な高いところで、何ものにも庇護されることなく、大鎌や九輪に掴まって生きてゆかねばならぬという厳しい試練が待ち構えているのではないのでしょうか。

行徳先生はこれまで社会主義革命の先鋒として、多大に尽力されてこられました。それ故、いまは非常に苦しい立場におられます。けれども石橋山合戦に敗走し、一時は形勢不利となった源頼朝公は、ここ土肥荘で復活の第一歩を踏んだのです。

先生のお望みとあらば、非力ながら私も、源氏方の土肥業平となつて先生をお助け致す所存にございます。」

「君はやけに頼朝公にこだわるね。私こそ宜しく頼むよ、岡村君。」

そういえばこの巖窟は、梶原平三景時が源氏方に鞍替えをする策を弄した場所ではなかつたかな。」

二人は暫くの間、高らかに笑い声をあげていた。

香果の章

伝二郎は頼んでおいた馬車に乗り込むと、海辺に近い軽便鉄道の門川停車場へと急いだ。この軽便は、数年前まで小さな箱型客車を人夫が手押しする人車鉄道として、小田原―熱海間を六時間かけて行き来していたもので、

最近になって、時を同じくして漸次輸入されたドイツ製

や英国製の機関車を模倣した国産の平竈型機関車を導入し、同間を二時間半で走行可能としていた。

昨日、岡村と語り合ったことで、伝二郎はそれまで鬱積していた胸の痞えもなくなり、東京行きの決心がついたのである。岡村も身辺整理がすみ次第、彼を追って上京してくるといふ。この日は見送りがてら、珍しい土産を渡すからと、門川停車場駅前の休息所に先廻りしている筈であつた。

「ポオオーッ

遠くから甲高い汽笛が届いた。

「先生、よかつた。間に合つた。」

岡村究蒸が息の整わぬ儘、小袋を抱えてやつてきた。

伝二郎は袋の中に眼をやり、驚いた面持ちで言葉を挟んだ。

「何んだね、これは。相模甘子にも似ているが真黄色じゃないか。それに両方が尖っている。」

袋の中から珍しい果実のひとつを手にとつてみるが、慌ただし停車場の活気の中で手を滑らせてしまつと、軌道の方へと転がつていった。

その時である。

「行徳伝二郎先生ですな。」

ものものしい雰囲気醸し出されるように、見知らぬ

警服姿の男が数人現れたかと思うと、伝二郎のところに歩み寄り、問い正した。

「先生、東京行きは適いませんで。小田原へはわれわれと共に参られよ。」

部下二人が伝二郎の腕を驚掴みし、形の上では同行を求めた態度を示したが、事実上捕縛であった。

伝二郎は官吏らに連行され車内へと消えた。岡村究丞はこの不穏を打破しようと、強硬姿勢をとる者達に向つていったが、直ぐに彼も多勢に包囲された。明らかに地元の人でないと判る荒くれや成らず者連中、山中社会に生きる奴等が僅かな褒賞と引き替えに、官吏の指図でこの仕事を引受けたのだつた。見窄らしいなりをした者の中には古い鉄砲を携えたものもいて、既に獲物を生けどつたがごとく勝ち誇つた素振りを見せていた。

ポオオーッ

汽車は音をたてて走り出した。

岡村はありつただけの力をふり搾つて声を張りあげ、走り去つた汽車の軌道を目がけ絶叫を繰返した。

「先生、笑うのです。俗世の柵しがらみなどとるに足りません。全て笑いとばしてやりましょう。栄えある明日の社会主義国家建設のために……。」

伝二郎は警察署の建物と思われる殺風景な一室にい

た。彼を取調べしている係官が場違いな多弁さをもつて、寡黙を貫く伝二郎の口を開かせたい様子でいた。眸を閉じ、伝二郎は己の行く末を案じ、一言咬いた。

「岡村君。どうやら私は頼朝公にはなれなかつたようだ。すると係官が怒鳴つた。

「行徳先生、他人の心配などしている場合ではございませんで。先生はあの者が何故逮捕もされず、賊共の手に委ねられたか判つていないようですな。かく言うこの私も土佐の、いや高知県の久礼出身ですから。郷里の土地には詳しい積りなのですよ。

あの岡村と名乗る男の出身地、幡多郡三原村狼内荘、確かに存在していましたがね、かつては。今はそんな所はないのですよ。

今を遡ること二十六年、佐賀県鹿島城にて謀反を企てた江本鎮平たけのへいとその一派が高知県に潜伏し、三ヶ月後に室戸岬近くで御用となりましたが、その際に逆賊共を隠匿したのが狼内の岡村家だつたのです。無論この集落は同罪とされ、全て焼き払われたという訳なのですよ。

お判りですか、先生、幾ら正義漢ぶつたつて、嘘を並びたてる不屈き者は仕置きせねばなりません。身元不明の不埒な木偶の坊は相応の遣り方で処罰されるのが望ましいのです。

それにこんなものを所持するとはなんたる不謹慎。」

伝二郎は眼を見張った。それは岡村が手土産にと渡し
てくれた黄色の果実だった。

「先生は相模甘子が冬にならないと収穫できないとご
存知でしょう。それとも過激思想に頭が気触れて常識を
お忘れになりましたかな。私も一応、教育水準の高いと
いわれる高知県人です。少しは知識教養は身に着いてい
る積りであります。

大体、こんなものはわが国では栽培されちゃおらん
のです。あるとすれば希臘か伊太利、それに米国の加州位
のものか。名称は確か、^{キウイ}「檸檬」。全く何という出鱈目
な奴なのだ。

それより行徳先生、私は今、空しくて悲しくてならん
のです。同郷の先輩、そして嘗ては自由志士として、わ
が国の有要人物と囑望されたお人を断頭台へ送る手筈を
やりくりせねばならぬのですからな。

先生は何故共産主義などという全く無益な道へと脱線
されてしまわれたのですか。私は土佐勤皇党员だった父
から、幼きより国家論なるものも叩き込まれてまいりま
した。それだけに先生の失点を許せんのです。

先生にはお判りですか？私の惨めなこの心中を。肥
前鹿島の乱の首謀者、江本鎮平を裁くべく判事として立
会った同郷の河鎌野人にも似た私の心持が……。」

「君、名まえは。」

伝二郎は黙って聞いていたが、立場を覆したかのよう
に、改めて、係官を「君」と呼んだ。

「久礼村の兼坂重通、現在は警視になつています。」

「兼坂君、確かに君は頭もきれるようだし、自分の職
場での出世もはやいのだろう。だが先程から聞いている
と君の話には他人を説得させる術の何ひとつも感じられ
ぬ。無益不要の道に填り込んだのは君の方だったという
ことだな。私や岡村を罵る前に少しは自省し給え。

断頭台だろうと私は喜んで進んでゆこう。」

兼坂警視は震えた握り拳で自らの頭を押さえたきり、
伏せた顔を上げられなかった。

「長寿必ずしも幸福ではなく、幸福唯だ自己の満足
をもって生死するにありと信ずる。人生に社会的価値とで
も名付くものがあれば、それは長寿にあるのではなく、
人格と事業とが周囲と後代に及ぼす感化影響の如何にあ
りと信じる。

不幸短命に病死しても清沢満之の如く、餓死しても杜
少将の如く、凍死しても深草少尉の如く、震死しても藤
田東湖の如くならば、不自然な死も却って感嘆すべきで
はないか。」

そう言うのと伝二郎は二度と口を開くことをしなかつ
た。

伝二郎は眼を見張った。それは岡村が手土産にと渡してくれた黄色の果実だった。

「先生は相模甘子が冬にならないと収穫できないとご存知でしょう。それとも過激思想に頭が気触れて常識をお忘れになりましたかな。私も一応、教育水準の高いといわれる高知県人です。少しは知識教養は身に着いている積りであります。

大体、こんなものはわが国では栽培されちゃおらんのです。あるとすれば希臘か伊太利、それに米国の加州位のものか。名称は確か、檸檬。全く何という出鱈目な奴なのだ。

それより行徳先生、私は今、空しくて悲しくてならんです。同郷の先輩、そして嘗ては自由志士として、わが国の有要人物と囑望されたお人を断頭台へ送る手筈をやりくりせねばならぬのですからな。

先生は何故共產主義などという全く無益な道へと脱線されてしまわれたのですか。私は土佐勤皇党员だった父から、幼きより国家論なるものも叩き込まれてまいりました。それだけに先生の失点を許せんのです。

先生にはお判りですか？私の惨めなこの心中を。肥前鹿島の乱の首謀者、江本鎮平を裁くべく判事として立会った同郷の河鎌野人にも似た私の心持が……。」

「君、名まえは。」

伝二郎は黙って聞いていたが、立場を覆したかのよう
に、改めて、係官を「君」と呼んだ。

「久礼村の兼坂重通、現在は警視になっていきます。」

「兼坂君、確かに君は頭もきれるようだし、自分の職場での出世もはやいのだろう。だが先程から聞いていると君の話には他人を説得させる術の何ひとつも感じられぬ。無益不要の道に填り込んだのは君の方だったということだな。私や岡村を罵る前に少しは自省し給え。

断頭台だろうと私は喜んで進んでゆこう。」

兼坂警視は震えた握り拳で自らの頭を押さえたきり、伏せた顔を上げられなかった。

「長寿必ずしも幸福ではなく、幸福唯だ自己の満足をもつて生死するにありと信ずる。人生に社会的価値とでも名付くものがあれば、それは長寿にあるのではなく、人格と事業とが周囲と後代に及ぼす感化影響の如何にありと信じる。

不幸短命に病死しても清沢満之の如く、餓死しても杜少将の如く、凍死しても深草少尉の如く、震死しても藤田東湖の如くならば、不自然な死も却って感嘆すべきではないか。」

そう言うのと伝二郎は二度と口を開くことをしなかつた。

門川停車場で、己が捕縛されたことで周囲を見る余裕もなかった伝二郎は、岡村が自分から引き離され、その後どのような目に遭うか、実際に愚連隊が現れ、彼を勦り者にしようなどと考えてもみなかったのである。

軌道に沿って連れていかれた岡村は、海を見下ろせる小高い丘に登るよう、鉄砲を持った男にこづかれた。両腕は後手に縛られ、眼隠しをされ、道端の小石に脚をとられる度に躓いた。

「うらあ、しつかり歩かんか。」

最早岡村究丞の生殺与奪の権限は連中の手に移っていた。

しかし岡村は、遮眼をされてはいたものの、何喰わぬ仕草で辺りの果樹園に籠めた柑橘の花の香りを楽しんでりしていた。そして業を煮やした数人が再び攻撃を加える。当の岡村は身体に受ける痛み苦しみが増すことなどまるで他人事であるかのように、嘲ら笑う声を止めようとしなかった。

遂に誰かが銃を発射した。岡村の急所を外したのだからか、じつと立った儘であった。だがもう生きていくのが無理な程、赤黒い血を滲しているのである。

「そんなものでこの俺様を仕留められるとも思っているのかねえ。」

岡村は小声で言うと、銃を撃った男に一直線に飛びか

かり、その喉笛を噛み切った。

恐れおののいた周囲の衆も、慌てて弾倉をしたため、引き金をひいた。瞬く間に芳ばしい花の香りが薬煙で掻き消されるほどの撃ち合いとなった。

翌朝、事後処理を行うべく現地を訪れた兼坂警視の部下たちは、正視できぬ光景をまのあたりにすることとなる。人気のない果樹園の片隅に、折り重なるように積まれた死体の山、それらの亡骸は全て喉に大きな裂傷を負っていた。殺害されて間もない、生々しい死臭を放ち、見る者の背筋を凍てつかせる狂気であった。

彼らが指揮した愚連隊が全員殺害されたことに合点のゆかぬ警帽たちは、すぐ近くに別の遺体が俯しているのを見つけた。それは集団のものとは違い、半ば白骨化しかなりの日数を経ているものと思われた。彼らがその頭蓋骨を確認しようと持ち上げると、あまりの戦慄で大声をあげてしまった。

その死骸は体形こそ人間の形をしていたが、口先から顎にかけての骨格が狒犬のように突出て、およそ人間と呼べる代物ではなかったからである。

警官たちの急務は、それら禍々しい光景の全てを果樹園に埋めてしまうことであつた。

結び

行徳伝二郎が土肥莊門川停車場にて捕縛されてから七箇月後、叛逆事件に關つたとされる二十四名の特別裁判が始まつた。これには傍聴禁止の措置がとられ、その理由として“ひとりの無政府主義者なきを世界に誇るに至るまで、飽くまでその撲滅を期する方針なり”と示された。

そして恩赦によつて無期懲役に減刑された半数を除く十二名、伝二郎の他、本文にも登場する外山賢堂、森下申吉、菅井すがも臯首をいいわたされ、断頭台の露と消えた。それは明治の社会主義運動にとつても紛れのない、最終楽章のない“断頭台への行進”であつたわけである。

了

